復興への絆（きずな）

～東日本大震災災害派遣レポート～ Vol.19

南島原市災害派遣職員　林田昭義

今月は、復興に向け幅広い活動をされている南三陸町の上山八幡宮神主、工藤真弓さんをご紹介します。

工藤さんは、東日本大震災の際、志津川の商店街で買い物中でした。当時4歳の息子さんはいつもお母さんのそばを離れない子でしたが、その日に限っては自宅でおばあちゃんと留守番をしており、家族離れ離れの状況で被災されました。長く激しい揺れの地震から津波が来るかもしれないと、すぐに小高い位置にある神社兼自宅に家族全員集合し、自宅より高い位置にある近所の公園へと避難しました。しかし、眼下に津波が押し寄せ神社裏山へと移動し、その後志津川小学校へと避難されました。それからは県内の親戚宅や避難所を転々とした後、登米市南方の仮設住宅に落ち着かれました。

工藤 真弓さん

工藤さんは、復興はインフラ整備を優先する傾向にあるが、歴史、文化、風土に調和したまちづくりを進め、次の災害に耐えうる南三陸町を造ることが震災を生き抜いた私たちの責務である。例えば、地名1つみても防潮堤が計画されている志津川地区本浜（もとはま）の由来は、もともと海浜で海に近い場所という意味から『本浜』となったそうで、実際震災により、数十センチ地盤沈下しています。地名の由来や自然災害による脅威、震災の記憶を後世に語り継いでいくことがとても重要と話します。

工藤さんは現在、当時の津波の様子や自身の経験などを紙芝居にして、町を訪れたボランティアの人たちに少しでも恩返しが出来ればと、震災の記憶を伝える活動もされています。また、子供たちの防災教育に役立てればと紙芝居をまとめた『つなみのえほん』を出版されました。是非、皆さんにご覧いただき、震災当時の様子を感じて欲しいと思います。

教えて！国民年金　年金額の改定

現在の国民年金支給額は、過去に物価が下落したにもかかわらず年金額を据え置いたことで、本来より2.5%高い水準（特例水準）となっていました。

しかし、先の法律改正で、マイナス1.0%の年金額の改定が行われることになりました。

改定後の年金は、平成25年12月（10月分・11月分）からの支給となり、新しい年金額は「年金額改定通知書」でお知らせします。

通知書は、12月4日以降に日本年金機構から、年金受給者に送付されます。なお、今後の特例水準解消に伴う改定スケジュールは、平成26年4月にマイナス1.0%、平成27年4月にマイナス0.5%が予定されています（物価・賃金が上昇した場合には引き下げ幅は縮小します）。

詳しくは、お近くの年金事務所へお尋ねください。

問 日本年金機構諫早年金事務所　☎0957(25)1666
南島原市 保険年金課　☎050(3381)5039 または 各支所

つなごう未来へ！島原半島世界ジオパーク

ジオパークであり続けるための取り組み

島原半島世界ジオパーク
キャラクター「ジーオくん」

問 島原半島ジオパーク推進連絡協議会　☎0957（65）5540

島原半島世界ジオパーク
キャラクター「ジーナちゃん」

地域振興の事例

ジオパークに認定された地域は、①「大地の遺産の保全」、②「大地の遺産を用いた教育活動」、③「大地の遺産を活用した観光振興」を行うことが求められます。

では、これら3つの取り組みを行うと、私たちの地域にどのような変化が起こるのでしょうか。

ここに、ジオパークの見学を目的に島原半島を訪れた観光客がやって来たとします。この観光客が島原半島をジオパーク的視点で楽しむためには、何が必要なのでしょうか。私たちは、まず観光客に「ここがジオパークである」ことを知らせなければなりません。そのためには、ジオパークの歓迎看板が必要です。次に、その観光客がジオパークに関する情報を得るための場所として、ジオパークの拠点施設が必要です。拠点施設で得た情報をもとに、観光客はジオパークの見どころ（ジオサイト）を巡り始めます。現地に不慣れな観光客をスムーズにジオサイトまで導くためには、ジオサイトの位置を示した総合案内板や誘導標識、さらには地図入りのパンフレット類が必要です。

総合案内板

誘導標識

最後に、ジオサイトにたどり着いた観光客が、説明者がいなくてもその場所を楽しめるよう、現地に解説板も必要となります。

これら以外にも、ジオパークをさらに深く楽しみたい人のための冊子（ガイドブック）や、ジオパークに関連した郷土のお土産品があれば、観光客は島原半島をジオパーク的視点で楽しみ、その思い出を自宅に持ち帰ることができます。このように、ジオパークに認定されれば、町の中にジオパークの看板が立ち、色々な場所でジオパークという文字やロゴマーク、マスコットを目にするようになります。これが目に見える地域の変化です。

しかし、ジオパークに関する冊子や、現地に設置した解説板の内容が、地層や石、火山の噴火に関する専門的な事ばかりだったらどうでしょうか？これでは、観光客はジオパークを楽しむことはできません。ジオパークの“売り”は、「かんざらしは、“島原大変”があったからこそ生まれた」、「観光名所のミヤマキリシマの群落は、雲仙火山の火山活動がなければ維持できない」、「阿蘇山の巨大噴火がなければ、原城はそこになかったかもしれない」といった、自然の営みと人々との関わりを描写した「物語」です。観光客が島原半島をジオパーク的視点で楽しむためには、これらの物語が分かりやすく書かれた冊子や看板を整備するだけではなく、この物語を観光客に正しく楽しく伝える人材が必要不可欠です。地域の人々が、自分の住んでいる地域に誇りを持ち、それを自分の言葉で発信していく、といった、目に見えない変化も求められるのです。

ジオパークで大切なのは「人」だと言われます。いくら学術的価値を持った素晴らしい景色があっても、そこに「人」がいなければジオパークにはなれません。ジオパークというしくみを活用して地域を元気にしていく主人公は、地域に住む人なのです。

ジオパークという仕組みを活用して、地域を元気にさせるには何をしたらいいでしょうか。次回は、ジオパークを活用した具体的な地域活性化の取り組みを紹介します。